第８１号(３月１５日発行)

極上の自然留学生だより

３月号　Special Ver.

ご卒業おめでとうございます

只見町教育長　渡部　早苗

昨年度末からのコロナ禍により今までの普通の生活が一変し、感染拡大地域との往来自粛等が発令され、寮生の皆さんには５月の連休に帰省を自粛してもらったり、長期休業の帰省後には健康観察期間を設けたりと 大変不便で辛い生活だったと思います。しかし、皆さんやご家族の皆様のご協力により寮生や只見高校生が１人も罹患することなく今年度の卒業式、入学試験等に臨み、進路決定に至ったことは感謝と共に心より祝福いたします。

３年前、家族と離れて只見町に来たときは期待よりも不安の方が大きかったのではないかと思います。そして３年間、日々の学校生活や寮生活の中で楽しいことやうれしいことばかりでなく、苦しいことや悩んだこともあったと思います。それを乗り越え、多くのことを獲得し、見事に成長して卒業の日を迎えられた皆さんに心からお祝いを申し上げます。

今卒業にあたりまして、特に忘れないでほしいことを二つお伝えします。

一つは、自分を高める努力を忘れないでほしいということです。心に目標を決めて目の前の困難から逃げることなく、それを乗り越え努力を続ける人であってほしいと思います。

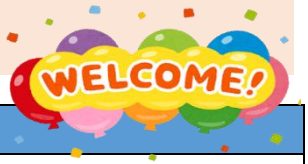
二つめは、周りの人に対する感謝と思いやりの心を忘れないでほしいということです。
そして、その心を 素直に伝えられる人になって下さい。それは、自分自身の豊かな人生を築いていく土台となるはずです。

自分に厳しく、人に優しく、今の自分にできることを精一杯がんばって 自分の未来を切り拓いていってください。
応援しています。

只見高校３年生　38 名の卒業式
うち第 17 期山村教育留学生 11 名は　寮生としての送別式も　行われました
卒寮生の皆さんにおかれては　親元を離れ只見で過ごした３年間を忘れず
新しい進路で　頑張ってほしいと思います　　❀前途に幸あれ❀

第 17 期　山村教育留学生送別式

4月の予定　＊入学式、始業式以外は未確定（3/10 現在）



只見高校		奥会津学習センター	
8(木)	入学式、始業式、ＰＴＡ・雪椿会入会式	8(木)	只見町山村教育留学 20 期新入生対面式
9(金)	写真撮影、部紹介、身体測定		

GOOD　NEWS ☆

第１８期山村教育留学生（２年生）福島県知事賞 受賞

福島再生。 いっしょに考える『福島、その先の環境へ。』チャレンジ・アワードについて

「福島、その先の環境へ。」をテーマに、子供たちのアイデア、思いを募集する作文コンクールを開催。
環境大臣賞、福島県知事賞等の受賞者が決定。

【中学生部門】（応募作品数197作品）　敬称略

環境大臣賞	福島県立ふたば未来学園中学校	林（はやし）　佳瑞（かずい）
福島県知事賞	猪苗代町立猪苗代中学校	吉田（よしだ）　昊生（こうせい）
福島県教育委員会教育長賞	福島県立ふたば未来学園中学校	阿部（あべ）　一葉（かずは）

【高校生部門】（応募作品数141作品）

環境大臣賞	福島県立福島高等学校	守谷（もりや）　和貴（かずき）
福島県知事賞	福島県立只見高等学校	三宅（みやけ）　実美（みみ）
福島県教育委員会教育長賞	福島県立郡山高等学校	秋山（あきやま）　風凜（ふうり）

【大学等部門】（応募作品数23作品）

環境大臣賞	立正大学心理学部	横山（よこやま）　葵（あおい）
福島県知事賞	慶應義塾大学環境情報学部	中川（なかがわ）　佳子（かこ）
福島県教育委員会教育長賞	慶應義塾大学環境情報学部	鈴木（すずき）　愛奈（あいな）

令和３年３月13日（土）に開催する「**いっしょに考える『福島、その先の環境へ。』シンポジウム**」において表彰予定。
左記３賞以外のものを含めた全入賞作品は、環境省ＨＰにおいて公開予定。

【表彰式の概要】

日時：令和３年３月１３日（土）
場所：ﾅｼｮﾅﾙﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ ｾﾝﾀｰJｳﾞｨﾚｯｼﾞ
(福島県双葉郡楢葉町山田岡美ｼ森8)
内容：小泉環境大臣、内堀福島県知事等より表彰状を手交予定。子供たちとのトークセッションを通じて、受賞者を顕彰する。

三宅さん受賞コメント

この度は名誉ある賞を頂き光栄に思います。力強い論文が書けたのも只見町で素敵な人々に出会えたからこそで、感謝の気持ちでいっぱいです。
今後も外部から来たからこそ感受できる福島と向き合っていきたいと思っています。

【受賞論文】　　＊ご本人の希望で　字数制限のない 1800 字バージョンで全文を掲載します。

「フクシマ」が「福島」と漢字表記されるにはあと何年かかるのだろうか。

10 年前に発生した、東日本大地震とそれに伴う原発事故により、今でも仮設住宅での生活を余儀なくされているかたがいる。

私が避難の方々の存在を意識するようになったのは高校生になってからだ。私は、東京生まれ東京育ちであるが、山村留学制度を利用して福島県立只見高等学校へ入学した。東京とは全く異なる只見町での生活は驚きと発見の連続だった。入学するとまず身体測定に加えて放射線検査があることに衝撃を受けた。私がすっかり忘れていた「放射線」の存在が只見出身の友人にとっては当たり前にある脅威なのだと知った時、悔しさに似た感情が湧き上がってきた事を強烈に覚えている。そして、その時に私は初めて東日本大震災の悲惨さが続いていることを痛感した。

期せずして、現在、世の中は新型コロナウイルス感染という社会的危機の中にある。大震災から 10 年目を目前にして、多くの命が理不尽な力によって奪われているのだ。今までの生活は一変し、価値観も大きく変化している。テレワークやオンライン会議などが普及したことで、場所を問わず働くことが可能となり、都会で暮らす必要性を感じなくなった人も少なくないのではないだろうか。これは福島県にとって大きなチャンスとも言える。この機会に福島に人を呼び込むことが出来れば、それこそ大震災からの復興の一助となりえるのだ。

そこで私は、福島県にある空き家をワーケーション施設に利活用するという案を提案する。福島県の空き家率は年々増加しており、平成 30 年に総務省が行った調査では全体（総住宅数）の 14%を超える 123500 戸もが空き家という結果だった。また、「空き家の発生に伴う問題の有無」を問うアンケートでは、「問題あり」と答えた人が８６％を占めた。問題の内容としては、「屋根や外壁の落下、飛散」「雑草、樹木の繁茂による近隣住民への被害」「空き家の老朽化による倒壊」などといった空き家の放置が原因となる意見が多く挙がった。そんな空き家を正しく活用することが出来れば、コストも抑えられ、近年深刻化する空き家問題の解決にも繋がる。この提案は、利用者、売主、社会の全てに優しいいわゆる「三方よし」の持続可能なビジネスモデルだ。

私は、只見町で二年間生活している中で「さなえさん」という 70 代のおばあちゃんと仲良くなった。さなえさんとは地域のイベントで知り合って以来、何度も家へ訪れては農作業を手伝うお礼に夕飯を頂いている。雪で農作業が出来ない時には、夕飯のお礼に、肩をもんだりする。私は毎度、都会ではありえないこの交換に、胸がいっぱいになってしまう。この町では、一人一人が自分の役割を認識してお互いに支えあっているのだ。そんな人と人との繋がりの強さは、災害時にも確実に応用できるのではないだろうか。特に、これまで多くの自然災害に見舞われてきた福島県では、災害時のリスクに対するノウハウを個人レベルで有している。そんな住民同士が一丸となって助け合うことで被害を最小限に抑えることが可能となる。

翻って、私は 15 年間暮らした東京では近所付き合いを全くしていなかった。むしろ、人付き合いを億劫に感じていたからだ。2018 年に内閣府が全国 20 歳以上を対象に行った「社会意識に関する世論調査」では、地域の人たちとよく付き合っていると回答した人はわずか 18.3%でしかない。加えて、ソーシャルディスタンスを保たなければいけない今、コミュニケーションの希薄化はますます進んでいると推測される。しかし、そんな時代だからこそ逆に人と人とのつながりを大切さを実感した。消費されることのない相互扶助の精神で成り立つこの小さな町に、新しい社会答えがあるのではないだろうか。

環境問題を解決する上で非常に重要とされている言葉に「think globally act locally」というフレーズがある。「地球規模で考え、足元から行動せよ」という意味であるが、むしろ、地方モデルこそ世界へ発信すべきではないだろうか。なぜなら持続可能で革新的な社会は地方にこそあると感じるからだ。福島が新しい社会のモデルとなり新たな可能性を示す事で追随するように都市へ、そして世界へとその輪を広げていきたい。したがって「think locally act globally」として、持続可能な社会を目指したい。

発行　只見町教育委員会
住所：福島県南会津郡只見町大字只見字町下 2591 番地の 30
電話：0241－82－5320　e - mail：gakkou@town.tadami.lg.jp